聖徳太子著『維摩経義疏』の「宴坐」の箇所の書き下し文

１．「、よ。ずしもするをとさなるなり」とは、それのをずれば、ずしものからずとなり。[＝舎利弗]はにたり。に**のをえて、にれ、てをめんとす**。るにのをすことは、し、**にして、せずとすれば、ぞをずるらん**。

　し**はなりとしてずることわざれば、にるともちぞれん**。

２．「それとは、にて・をぜざる、をとす」とは、うこころは、**にし、るべきく、けるべきし、をづけてとす**。

　、**して、をてにる**、即ち、・をにてず。**あにくとづけん**。のはをむることわざるをす。

３．「をたずして、ものをずる、をとす」とは、「」のは「」なり。はにすとも、も**にのをじてにをするを、ちづけてとす**。

　はち**らをすのみ、をするをわしとす。ぞくなることをん**。のはのをしくすることわざるをす。

４．「をてずして、ものをずる、をとす」とは、「」とはをいう。うこころは、をくすとも、また**にをじ、にいをするを、ちのとづく**。

　は、**「はてるべし、はるべし」とす。ちをす。ぞとすことをん**。のは、のをしくすることわざるをす。

５．「はにせず、たにもらず、をとす」とは、[・]のを「」とし、]を「」となす。うこころは、**「にせず、にせず、するを、ちくとづく**。

　は、**はてるべし、はすべしとす。ちをす。ぞくなることをん**。のはをずることわざるをす。…

６．「にてぜずして、もをす、をとす」とは、「」のは「」なり。しく、**にして、てるべきし**とし、またをせば、**ちのとづく**。

　は、**はるべし、はすべしとす。ちこれをる。ぞくとづけん**。のは、をしくすることわざるをす。

７．「をぜずしてもにる、をとす」とは、しく、**にして、ずべきし**とせば、これ**ちらをす**。

　は、**にじてのち、ににるとす。ちをす。ぞづけてとさん**。のは、と方便とをすることわざるをす。…

# ◎原文（大正大蔵経から）

１．　唯舍利弗不必是坐爲宴坐者。夫論理中之宴。不必如舍利弗也。眞子既爲少乘故。患世散亂欲隱山林以攝身心。而淨名致呵者。若解萬境即空不存彼此者。何有身心而生散亂也。若存萬法是有不能亡者。雖入山林。則散亂何離也。

２．第二別呵。夫宴坐者不於三界現身意是爲宴坐者。言彼此倶亡。無山可入。無世可避。是則身心不現於三界。是名爲宴。汝存彼此。棄俗入山。則身心現於三界。豈名好宴。此句呵不能攝身心。

３．不起滅定･而現諸威儀是宴坐者。起之言出。智雖合空。而現有中種種威儀。無方化物。乃名爲宴。汝則唯心自度。益物爲煩那得好宴。此句呵不能平空有二境也。

４．不捨道法而現凡夫事是爲宴坐者。道法謂聖法。言雖能聖法。亦俗法中現凡夫事。隨機化物。乃名眞宴。汝存凡夫可捨聖道可取。則成分別。那得爲宴。此句呵不能平凡聖二境也。

５．心不住内亦不在外是爲宴坐者。二諦理爲内。六塵爲外。言不著二諦。不著六塵。内外雙亡乃名好宴。汝存六塵可棄二諦可修則成是非。那得好宴也。此句呵不能亡是非。　肇法師云。身爲幻宅。曷爲住内。萬物機斯虚。曷爲在外。小乘防念故繋心於内。凡夫多求故馳想於外。大士齊觀故内外無寄也。

６．於諸見不動而修行三十七品是爲宴坐者。動之言出。若能解諸見即空無可捨。亦修行三十七品。乃名眞宴。汝存諸見可遣道品可修。則是取相。何名好宴。此句呵不能平眞俗。

７．不斷煩惱而入涅槃是爲宴坐者。若能解煩惱即空無可斷。是則自證涅槃。汝存煩惱已斷方入涅槃。則成分別。何名爲宴。此句呵不能證涅槃方便。

肇法師云。煩惱眞性即是涅槃。慧力強者觀煩惱即空。是入涅槃。不待斷而後入也。